【個人研究】

# 高齢者のキャリア意識
# ～55歳から88歳までの900名に対する意識調査から～

益田　勉*

# The effects of career intentions on the psychological satisfaction of the elderly: A study based on a survey of 900 people ranging in age from 55 to 88 years

Tsutomu MASUDA

The purpose of this study was to ascertain the effects of career intentions as a factor governing the degree of satisfaction and spirituality of the elderly. Nine hundred individuals ranging in age from 55 to 88 years old were surveyed nationwide. Results of multiple linear regression analysis revealed that the career intentions of the elderly contributed significantly to mental satisfaction and mental stability. Moreover, results revealed that continued engagement had a more positive effect on spirituality than did disengagement. Thus, results revealed that actions such as "disengagement," "withdrawal" and "retirement" were unable to adequately describe the career intentions of the elderly. This paper discusses how pursuing a meaningful career is necessary for the elderly and the rest of society as well.

Key words：career intentions, successful aging, gero-transcendence
キャリア志向、サクセスフル・エイジング、老年性超越

## はじめに

平成26年簡易生命表によると、我が国の男性の平均寿命は80.50年、女性の平均寿命は86.83年となり前年と比較して男は0.29年、女は0.22年の平均寿命の伸長がみられた。高齢者の仲間入りをする現在65歳の男性の平均余命は19.29年、同じく女性の平均余命は24.18年であり、平均的な日本人は20～25年という長い老後を過ごす時代を迎えている。老後をどのように過ごすかは、すぐれて個人的な問題といえるが、高齢者本人およびそれを取り囲む社会にとって高齢者が生き生きと過ごすことのできる社会的・制度的な環境の整備は、世界の中で少子高齢化のトップを走る我が国にとって喫緊の課題といわなければならない。2012年に11年ぶりに改定された「高齢社会対策大綱」（内閣府, 2012）では、『戦後生まれの人口規模の大きな世代が65歳となり始めた今、「人生65年時代」を前提とした高齢者の捉え方についての意識改革をはじめ、働き方や社会参加、地域におけるコミュニティや生活環境のあり方、高齢期に向けた備え等を「人生90年時代」を前提とした仕組みに転換させる必要がある。』とうたっている。しかし、現実には、『60代、70代、80代、90代の期間の生き方のモデルが社会に確立できていないしモデルの根拠となる国民の意識実態さえつかめていない』（前田, 2012）という状況がある。高齢者の望ましい姿として「生涯現役」「悠々自適」あるいは「PPK：ピンピンコロリ（なくなる直前

* ますだ　つとむ　文教大学人間科学部心理学科

まで元気に活動する)」といった必ずしも確かな根拠のない願望としてのスローガンを超えるものはあまり見当たらないように思われる。

一方で高齢化と並ぶもう1つの人口トレンドである少子化は、労働力人口の急速な減少という大きなインパクトをもたらそうとしている。我が国の労働力人口の2010年の実績値は6632万人だったが、経済成長と労働参加が適切に進まなかった場合の2020年の労働力人口の推計値は6186万人、2030年の推計値は5678万人とされている（厚生労働省, 2012)。20年間で労働力人口が15%減少するというのである。清家（2013)は、こうした悲観的なケースに陥らないための方策を提言し、『育児と仕事が両立できる働き続けやすい環境を整えて出生率を上げ、女性の労働力率を高めるとともに、高齢者の能力発揮を阻む制度的要因を除去して、高齢者の労働力率を高めて生涯現役社会を実現することが必要』としている。こうした問題意識からは、「高齢者のキャリア」を本人の生きがいや満足感の範疇にとどまらない、社会経済的な視点からも検討する必要性が示唆される。

本研究は、高齢者のキャリアを考えるための基礎的研究として高齢者のキャリア意識に焦点を当てる。高齢者がどのような意識で生活すべきか、ということについては、社会老年学における「サクセスフル・エイジング」の問題として研究の蓄積がなされてきた。その中で「活動理論」「離脱理論」「継続性理論」「老年性超越理論」などが主張されてきており、その概要は次項で紹介することにしたい。ただし、どれが最も説得的な理論かということよりも、場合によって妥当な理論が異なるという「中範囲の理論」としての妥当性にとどまるということが大方の結論のように思われる。これは個人差や環境差の問題としてとらえる必要があるということでもある。キャリア意識の個人差に注目する中で、その個人差が生活満足度やスピリチュアリティなど他の主観的変数とどのような関係性をもつのかについても検討を行う。社会老年学における「サクセスフル･エイジング」研究では、加齢によって主観的幸福感がさほど低減しないという実証データがたびたび注目されてきた。キャリア意識と生活満足度との関係をみるのはこうした先行研究の追試の意味がある。また、スピリチュアリティの問題を取り上げるのは、上述の生活満足とは異なる位相の満足感、充足感を把握する可能性を追究したという意図による。さらに社会老年学における「超越理論」は、個人の自己同一性や社会関係性を超越する境地に向けての高齢者固有の発達プロセスを仮定するものであるが、それがスピリチュアリティの概念に類似していると考えられることも、スピリチュアリティを分析変数に加える理由として挙げておきたい。

## 高齢者の生き方に関する諸理論

老年期は、生きていくための財産や人的つながりの喪失、身体機能や健康状態の低下や喪失、来るべき死を前にした人生の意義や目的の喪失など、さまざまな喪失を現実として経験する時期である。しかし､こうした喪失経験にもかかわらず、少なくとも70歳代までの前期高齢期においては主観的幸福感が比較的維持されるという知見が報告されてきた（Larson, 1978；Mroczek & Kolarz, 1998)。こうしてサクセスフル・エイジングの研究の大きな流れの1つが高齢者の心理的適応を扱うものとなってきた。

離脱理論と活動理論

ハヴィガースト（Havighurst, 1961）は「サクセスフル・エイジング」の操作的定義の1つとして「人生の最盛期である中年期における活動を維持していること」を挙げた。これは、中年期を人生の完成段階とみなし、この段階をいかに長く維持するかがサクセスフル・エイジングの課題であると主張するものである。カミングとヘンリー（Cumming & Henry, 1961）は、こうした見解を批判して次のように述べている。『私たちは望ましい社会的・個人的発達のモデルとして中年期の状態を考えがちである。その状態からいくらかでも逸脱していると、否定的で望ましくないものとみなしがちである。その結果、高齢期それ自体が中年期とは質的に異なった特性をもつ発達段階であるということに考えが及ばなくなってしまう。』こうして高齢期特有の発達の様相として彼らが主張したのが「離脱（disengagement)」という概

念だった。以下小田（2004 a）をもとに離脱理論（Disengagement theory）の概要をレビューする。離脱理論では、加齢（aging）を高齢者と彼が属する社会システムにおける他者との間で生ずる相互撤退（mutual withdrawal）あるいは離脱（disengagement）とみなす。高齢者は、ある人々からは顕著に撤退し、他の人々とは親密な関係を維持することになる。こうした対象による程度の差を含む撤退は自分自身への関心の増大から始まる。このような過程を経て中年期においてその人と社会の間に存在していた均衡は新たな均衡にとって代わられる。究極的な離脱の形態は、不治の病や死である。社会と個人はこうした究極的な離脱に向けて事前に準備を整える。それは、樹木の葉が冬に完全に落ちてしまうずっと前に徐々に枯れたり萎れたりしていくのと同様に自然で不可避の過程である。その過程は社会にとっても個人にとっても必要な過程であって、両者を満足させることになる。離脱が自然で不可避であるということは、それが人間に本来備わっている過程と考えるからであり、社会システムの側からはそのシステムの均衡を維持するために埋め込まれているメカニズムであると考えるからである。高齢者にとっては、離脱は自分が所属する社会システムを維持するための義務でさえあり、高齢期においても離脱しない者（“late-life engagers”）は文化的価値を内面化できていない人間であり、社会システムの維持に対して侵害行為をしていることになる（Cumming & Henry, 1961）。したがって、離脱は望ましいことであると自ら進んで受け入れることが高齢期にうまく適応することであり、幸福な老後を過ごすことにつながるとするのである。こうした離脱理論は、発表直後から論争を生み出し、大きな批判にさらされた。批判の最大の理由は、実証的な検証がなされなかったことによる。すなわち、離脱は必ずしも自然で不可避的な過程とはいえず、高齢者が社会からの撤退を望ましいことと考えて自ら進んで受け入れているという証拠も見いだされなかった。また、離脱によって主観的幸福感が高まったという検証も得られなかった。

離脱理論が登場したことにより、中年期の状態を長く維持することがサクセスフル・エイジングにつながるというハヴィガーストらの従来の主張は活動理論（Activity theory）と呼ばれることになった。高齢者は生物学上、健康上不可避な変化を除いて、本質的に中年と同じ心理的欲求をもっており、可能な限り中年期の活動を継続的に維持することで、満足した高齢期を過ごすことができるという（Havigurst, 1961）。その後、ハヴィガーストら（Havigurst, Neugarten and Tobin, 1968）らが、離脱理論と活動理論、そして生活満足の関係を分析したうえでたどり着いた結論は、離脱理論も活動理論も、単独では現実の多様な加齢パターンを説明できないということであり、それは両理論を折衷的に用いる視点の必要性を示唆するものだった。

継続性理論

離脱理論と活動理論の論争が明確な結論を生むことなく終結した後も、離脱理論に対する反証として、成人期から老年期にかけてのパーソナリティの安定性・連続性を示す一連の研究が続けられた。これを継続性理論（Continuity theory）といい、その主要な提唱者であるアチュリー（Atchley, 1989）は継続性理論を次のように概括している（小田，2004a）。

『中高年者は、変化に適応するための方法や手段を選択する際に、現在の内的、外的構造を維持しようと試み、その実現のために馴染みの領域で馴染みの方法を好んで用いる傾向がある。中高年者は、過去の経験の重さに引かれて、そうした方法を加齢にともなう変化に適応する主たる方法として用いる。継続性理論でいう継続性は、何も変化していないとか、以前とまったく同じということではない。変化があっても、その変化が過去の経験に積み重ねられるものであったり、過去の経験に結びつくものであれば、その変化は継続性の一部とみなされる。自らの認識と社会環境からの圧力から、高齢者は内的継続性と外的継続性に向かって動機づけられ、継続性を維持したいという気になるのである。』

アチュリー（Atchley, 1989）は、継続性理論を構成する主要な要素を次の4つに分類している。(1) 内的構造：自己概念、個人的目標、世界観、

人生観、道徳心、態度、価値、信念、知識、スキル、気質、好み、コーピングの方法などが緩やかに構造化されている。それらが、他の人とは区別されるその人らしさを形づくっている。

(2)外的構造：社会的役割、活動、社会関係、居住環境、立地条件などが構造化されて、他の人とは異なるその人独自の生活構造やライフスタイルを形づくっている。

(3)目標設定：継続性理論は、成人は発展（発達）的方向へ向けた目標をもっていると考える。発展（発達）的目標とは、自分自身や自分の活動、社会関係、環境などを自分の理想へ向けて発展（発達）させることである。

(4)適応能力の維持：成人は、発達するにつれて、何が自分に満足を与えるのかということについて明確な考えをもつようになる。そして内的構造を完全なものにし、与えられた環境の下で生活満足の最大化を実現する生活構造を作り、洗練することを目指すようになる。

高齢期には様々な変化が生じる。そうした変化に対して高齢者がどのように適応しようとしているのかを説明するのが継続性理論であり、継続性理論は、継続的な成人発達の過程を説明する社会心理学的理論であるともいわれる（Atchley, 1995）。

老年性超越理論

老年的超越（Gerotranscendence）は、トーンスタム（Tornstam, 2005）が提唱した概念である。トーンスタムは、カミングら（Cumming & Henry, 1961）の離脱理論を再評価し、離脱理論と同様に高齢期に固有の発達段階があることを主張した。従来のサクセスフル・エイジングのモデルが活動性、生産性、効率性、個性、自律、健康、社交性といった中年期の美徳の継続に過ぎないことを批判し、身体機能の低下および社会活動の減少に対して、高齢者は離脱、非生産性、依存、病気や障害を受容することにより否定的感情を抑制すると考えた。老年的超越は一種の離脱現象であり、老年的超越を達成した者は通常の価値観から離れて、加齢にともなう社会的関係の縮小に合わせた価値観や行動特性を身に着けるようになる。老人的超越は、宇宙的次元（The Cosmic Dimension）、自己の次元（The Dimension of the Self）、関係性次元（The Dimension of Social and Personal Relationships）の3つの次元から説明される。

(1)宇宙的次元は、①現在と過去の境界が消え去り、子供時代が戻ってくる、②先祖とのつながりや愛着が強く意識される、③死への恐れが消え、生と死に関する新たな理解が進む、④人生の不思議が意識される、⑤様々な経験、特に自然の中での経験を楽しむようになる。などの内容を含む。

(2)自己の次元は、①自己の隠れた側面（良い面も悪い面も含めた）を発見する、②自己中心性が弱まる、③体を大切にしながらも、それにとらわれることがなくなる、④特に男性において利己主義から利他主義への転換が起こる、⑤人生の様々な出来事が1つの全体につなぎ合わされることに気づき、静寂と孤独を求めるようになる。などの内容を含む。

(3)関係性次元は、①表面的な関係性への興味が薄れ、一人でいることを求めるようになる、②自己と役割の違いが意識され、いくつかの役割を放棄したり、新たなより充実した役割を得たりする、③責任を離れることによって成熟する、④物的豊かさを軛と感じるようになり、禁欲に自由を感じるようになる、④表面的な理非曲直に興味を感じなくなり、物事を判断したり、助言を行なったりすることを差し控えるようになる。などの内容を含む（Tornstam, 2005）。

トーンスタムは、これら3次元に関する尺度開発を行い、その発達的変化を定量的に検証している（Tornstam, 2005）。具体的には、質問紙調査データについて探索的因子分析を行ったところ、宇宙的次元、首尾一貫性（自己の次元）、孤立（関係性次元）という3つの因子が見いだされた。これらの因子についてスウェーデンの高齢者サンプル（65歳以上）のデータを分析した結果、宇宙的次元と関係性次元に関して65歳以降、80歳代、90歳代においても上昇することが確認された。

## 問題と仮説

以上、サクセスフル・エイジング研究にみられる高齢者の生き方に関する諸理論をみてきた。離脱理論と活動理論は、高齢者にとってどのような生き方がサクセスフルかについて論ずるものであり、サクセスの「内容」を検討するものだったといえる。継続性理論は何がサクセスフルであるかについての価値判断を離れて、サクセスに向かう「過程」を論ずるものといえよう。老年性超越理論は、サクセスという中年期の価値の延長線と考えられるものを離れて、高齢者特有の価値構造を仮定し、そのような固有の価値に向けての高齢者独自の発達プロセスを明らかにしようとしていると考えられる。

小田（2004b）は、こうした諸理論が示唆する高齢期の適応課題を次のように総括している。

(1)離脱理論に従えば、退職は、職業を軸にした社会的役割や地位に基づいて形成されていた幾多のフォーマルな社会関係からその人を解放する。そのことによって自分を捉えなおす機会を提供し、主意的で選択的な社会関係や活動の比重を高めることによってストレスが低減し、満足感を高めるであろう。

(2)活動理論に従えば、高齢期になっても、社会的役割と責任を伴った活動を続けることができれば、自分の存在意義や居場所を確認でき、自尊心を維持することができて生活満足度も高くなるであろう。

(3)継続性理論から示唆されることは、青年時代、中年時代には、皆それぞれが、それなりに個性的な生き方をしてきたのだから、高齢期になったからといって、皆が一斉に青年・中年期の生き方から決別して高齢者全員に共通するような生き方ができるわけではないということであろう。

さらに、小田（2004b）は触れていないが、

(4)老年性超越理論から示唆されることは、高齢者は青年期、中年期とは異なる固有の価値観の中、あるいはそうした価値観への転換の中を生きているのだから、それを尊重したうえで、高齢者の実存に寄り添うべきであろう。

上述したように、ハヴィガーストらが離脱理論と活動理論、そして生活満足の関係を分析したうえでたどり着いた結論は、離脱理論も活動理論も、単独では現実の多様な加齢パターンを説明できないということであり、それは両理論を折衷的に用いる視点の必要性を示唆するものだった。とすれば、どのような場合に離脱理論がより妥当で、どのような場合に活動理論がより妥当といえるのか。また、継続性理論や老年性超越理論で示唆された望ましい老後への過程は、実際の高齢者の意識の中でどのように跡付けることが可能なのか。本研究は、高齢者に対する意識調査をもとに、高齢者が考える望ましい生き方としての「キャリア志向」の個人差を測定し、キャリア志向と生活満足度、キャリア志向とスピリチュアリティの関係をみようとするものである。なお、スピリチュアリティを測定変数に加える理由として、次の2項目を挙げておきたい。①主観的満足感や高齢者の生活満足感に関する多くの尺度は、中年期の価値観の延長と考えられるものが多く、高齢期における価値観の転換に対応しない場合が多いと考えられること、②老年性超越理論は、提唱者のトーンスタムは明示していないものの、スピリチュアリティの概念との類縁性が認められること。

仮説として次の3項目を挙げる。

(1)高齢者のキャリア志向には、活動理論や継続性理論によって概念化された「継続志向」的なものと、離脱理論や老年性超越理論によって概念化された「離脱志向」的なものの2つのタイプが認められる。

(2)キャリア志向は満足度に正の影響を及ぼす。キャリア志向によって満足度が影響される程度は年齢、性別、健康状態、経済状態などの属性変数を上回る。

(3)キャリア志向はスピリチュアリティに正の影響を及ぼす。キャリア志向によってスピリチュアリティが影響される程度は年齢、性別、健康状態、経済状態などの属性変数を上回る。

## 方法

WEB調査会社に登録しているモニターに対するWEB調査として実施した。全国に在住する55～88歳の男女900名を対象とした。男女別内訳は男性450名、女性450名、年齢別内訳は55～64歳300名、65～74歳300名、75歳以上300名であった。性別と年齢階層（55～64歳、65～74歳、75歳以上）別のクロス集計は各セルとも150名であった。また、居住形態別には、独り暮らし141名（15.7%）、夫婦のみ408名（45.3%）、夫婦と子ども265名（29.4%）であった。収入ある仕事への従事状態は従事している300名、従事していない600名であった。調査は2015年6月26日から6月29日までの間に行われた。

**調査内容**

＜キャリア志向＞

先行研究として紹介した離脱理論、活動理論、継続性理論などの諸理論を参照して望ましいキャリア（仕事あるいは生活）のあり方について25項目の質問項目を作成した。回答様式はリッカート尺度5段階評定（5：当てはまる、4：やや当てはまる、3：どちらともいえない、2：やや当てはまらない、1：当てはまらない）である。

＜満足度＞

主観的幸福感尺度や高齢者を対象とした生活満足度などにかかわる尺度を参照して6項目の満足度にかかわる質問項目を作成した。回答様式はリッカート尺度5段階評定（5：当てはまる、4：やや当てはまる、3：どちらともいえない、2：やや当てはまらない、1：当てはまらない）である。

＜スピリチュアリティ＞

三澤・野尻・新野（2010）によって提示されたスピリチュアリティ評定尺度（16項目）を用いた。原尺度の質問項目は「多くの出来事を乗り越えて、今の自分があると思いますか」といった疑問形の質問形式になっているので、それをそのまま使用し、回答様式はリッカート尺度5段階評定（5：非常にそう思う、4：ややそう思う、3：どちらともいえない、2：あまり思わない、1：全く思わない）である。

＜属性変数＞

性別、年齢階層、健康状態、経済状態などに関する質問を行い、属性変数として用いた。

分析方法

質問内容のうち、＜キャリア志向＞と＜スピリチュアリティ＞については、探索的因子分析および確認的因子分析を行い、尺度構成を行った。属性変数および＜キャリア志向＞尺度を独立変数、＜満足度＞および＜スピリチュアリティ＞尺度を従属変数として、重回帰分析を行い＜キャリア志向＞が＜満足度＞や＜スピリチュアリティ＞に寄与する様相を分析した。

## 結果

＜尺度構成＞

キャリア志向に関して用意した25項目の質問項目について項目の取捨選択を行いながら探索的因子分析を行い、内容的に妥当と思われる2因子を得た（最尤法・プロマックス回転）。結果を表1に示す。第1因子は「今までの経験や実績を活かして社会に貢献したい」「どのようにしたら今までの経験や実績がまわりの役に立つのか考えていきたい」「これからも世の中の人や社会のために役立ちたい」などの因子負荷が高く、「継続志向」と命名した。第2因子は、「仕事や生活面においてなるべく早く現役を引退して悠々自適を楽しみたい」「無理をして割の合わない仕事をするより思い切って仕事を離れたい」「今までの経験や実績を活かすよりも、むしろ自由で身軽な自分でいたい」などの因子負荷が高く、「離脱志向」と命名した。なお、これらの2因子の因子間相関は $r = -.255$ であり、低い負の相関を示していた。2因子を構成する各6項目の項目平均値によって「継続志向尺度」と「離脱志向尺度」を構成し、それぞれの信頼性係数（クロンバックの $\alpha$）を算出したところ、順番に.86、.73であり、ほぼ十分な信頼性を示していた。

満足度に関しては、表2に示す6項目で満足度尺度を構成した。信頼性係数（クロンバックの $\alpha$）は、.72であり、ほぼ十分な信頼性を示していた。

スピリチュアリティの評定については、三澤・

**表1　キャリア志向に関する因子分析の結果**

| | 平均 | 標準偏差 | 因子1 | 因子2 |
|---|---|---|---|---|
| 因子1：継続志向（α＝.86） | | | | |
| 今までの経験や実績を活かして社会に貢献したい | 3.26 | 0.88 | 0.814 | 0.010 |
| どのようにしたら今までの経験や実績がまわりの役に立つのか考えていきたい | 3.20 | 0.88 | 0.812 | 0.057 |
| これからも世の中の人や社会のために役立ちたい | 3.41 | 0.85 | 0.781 | 0.070 |
| 仕事や生活面において現役を引退しても側面からサポートする役割をもち続けたい | 3.18 | 0.93 | 0.726 | 0.052 |
| 仕事を辞めてもどうしたら社会とのつながりが保てるかを探していきたい | 3.06 | 0.94 | 0.627 | 0.005 |
| 仕事や生活面において可能な限り現役として活動し続けたい | 3.17 | 1.05 | 0.545 | −0.176 |
| 因子2：離脱志向（α＝.73） | | | | |
| 仕事や生活面においてなるべく早く現役を引退して悠々自適を楽しみたい | 3.11 | 0.96 | 0.009 | 0.676 |
| 無理をして割の合わない仕事をするより思い切って仕事を離れたい | 3.20 | 0.94 | −0.034 | 0.624 |
| 今までの経験や実績を活かすよりも、むしろ自由で身軽な自分でいたい | 3.43 | 0.86 | −0.146 | 0.540 |
| これからはゆったりと静かな生活を楽しみたい | 3.74 | 0.84 | 0.100 | 0.528 |
| 仕事や生活面においては適当な時期に後進に道を譲って現役を引退したい | 3.29 | 0.95 | 0.196 | 0.525 |
| 仕事を辞めたら社会とのつながりはなるべく少なくしたい | 2.85 | 0.91 | −0.247 | 0.429 |
| | 因子相関行列 | | | |
| | | 因子2 | −0.255 | |

**表2　満足度項目**

| | 平均 | 標準偏差 |
|---|---|---|
| 満足度（α＝.72） | | |
| 自分は去年と同じくらい元気があると思う | 3.32 | 0.98 |
| 最近不安に思うことがたくさんある（R） | 2.88 | 1.03 |
| 年をとって生きていくのは厳しいことだと思う（R） | 2.57 | 0.95 |
| 今の暮らしぶりや生き方に満足している | 3.39 | 0.96 |
| 自分は生きていても仕方がないと思う（R） | 3.90 | 0.98 |
| 年をとることは、若い時にかんがえていたより良いことだと思う | 3.09 | 0.84 |

R：逆採点項目

野尻・新野（2010）によって提示された16項目からなる評定尺度を用いた。原尺度は確認的因子分析により5因子からなる2次因子モデルの適合性が確認されている。ちなみにその5因子は、「乗り越えた道の確認」「他者とのつながり」「超越的なものへの関心」「自己存在の探求」「未来への心の準備」と命名されている。本研究では追試的に16項目に対して最尤法による因子抽出を行ったところ、「自分はいつお迎えが来ても心の準備はできていると思いますか」の共通性が.055と突出して低かったため、これを除外した15項目について再度探索的因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行ったところ3因子が抽出された。その結果を表3に示す。第1因子は、「あなたは祈ることでやすらぎや幸せを感じると思いますか」「自分は目に見えない大きな力によって生かされていると思いますか」「自分と宇宙（自然）との間にはつながりがあると思いますか」などの因子負荷が高く、「大いなるものとの一体感（一体感）」と命名した。第2因子は、「人生の節目を乗り越えてきたことは意味があったと思いますか」「多くの出来事を乗り越えて、今の自分があると思いますか」「自分が生きてきたことは何らかの意味があると思いますか」などの因子負荷が高く、「生きてきたことの意味感（意味感）」と命名した。第3因子は、「あなたは誰でもわけへだてなく受け入れようと思いますか」「あなたは出会った人やまわりの人をゆるそうと思いますか」などの因子負荷が高く、「他者に対する受容感（受容感）」と命名した。3因子を構成する各項目の項目平均値によって「一体感尺度」「意味感尺度」「受容感尺度」を構成し、それぞれの信頼性係数（クロンバックのα）を算出したところ、順番に.81、.82、.68であった。「一体感尺度」と「意味感尺度」は、十分な信頼性を示したが、「受容感尺度」は、やや低い信頼性にとどまった。

**表3　スピリチュアリティに関する因子分析の結果**

| | 平均 | 標準偏差 | 因子1 | 因子2 | 因子3 |
|---|---|---|---|---|---|
| 因子1：大いなるものとの一体感（一体感）（α＝.81） | | | | | |
| あなたは祈ることでやすらぎや幸せを感じると思いますか | 2.83 | 1.01 | 0.775 | −0.271 | 0.119 |
| 自分は目に見えない大きな力によって生かされていると思いますか | 3.31 | 1.01 | 0.747 | 0.073 | −0.121 |
| 自分と宇宙（自然）との間にはつながりがあると思いますか | 3.15 | 0.99 | 0.726 | −0.015 | −0.082 |
| あなたは生きる意味を問いかけながら生きていると思いますか | 3.05 | 0.97 | 0.481 | 0.114 | 0.051 |
| 自分と自分の先祖や子孫（来世）は強い結びつきがあると思いますか | 3.36 | 0.94 | 0.471 | 0.201 | −0.007 |
| 今、あなたにとって人生の意味は深まってきたと思いますか | 3.21 | 0.84 | 0.431 | 0.312 | 0.016 |
| 今生きている自分は親の生き方に影響されていると思いますか | 3.35 | 0.93 | 0.338 | 0.100 | −0.030 |
| 因子2：生きてきたことの意味感（意味感）（α＝.82） | | | | | |
| 人生の節目を乗り越えてきたことは意味があったと思いますか | 3.65 | 0.85 | −0.053 | 0.844 | −0.031 |
| 多くの出来事を乗り越えて、今の自分があると思いますか | 3.84 | 0.85 | −0.138 | 0.820 | −0.042 |
| 自分が生きてきたことは何らかの意味があると思いますか | 3.55 | 0.85 | 0.140 | 0.621 | −0.001 |
| あなたは誰かを大事にし、大事にされていると思いますか | 3.67 | 0.87 | 0.108 | 0.530 | 0.058 |
| あなたは自分の得たものをまわりの人に伝えていきたいと思いますか | 3.33 | 0.84 | 0.238 | 0.316 | 0.186 |
| 因子3：他者に対する受容感（受容感）（α＝.68） | | | | | |
| あなたは誰でもわけへだてなく受け入れようと思いますか | 3.21 | 0.83 | −0.092 | −0.088 | 0.835 |
| あなたは出会った人やまわりの人をゆるそうと思いますか | 3.32 | 0.69 | 0.057 | 0.108 | 0.525 |
| 心残りのないように、まわりの人とよい関係を作ろうと思いますか | 3.51 | 0.85 | 0.082 | 0.284 | 0.378 |

因子相関行列

| | | |
|---|---|---|
| 因子2 | 0.729 | |
| 因子3 | 0.559 | 0.628 |

**表4　属性変数および＜キャリア志向＞尺度を独立変数、＜満足度＞尺度を従属変数とする重回帰分析**

| 従属変数 | | | 満足度 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| モデル | | | 1 | | | 2 | | |
| | | | ベータ | t 値 | 有意性 | ベータ | t 値 | 有意性 |
| 独立変数 | 属性 | （定数） | | 20.489 | ** | | 14.899 | ** |
| | | 性別 | −0.057 | −1.883 | NS | −0.059 | −1.958 | NS |
| | | 年齢 | 0.090 | 2.951 | ** | 0.082 | 2.742 | ** |
| | | 健康状態 | −0.237 | −7.674 | ** | −0.226 | −7.435 | ** |
| | | 家計状態 | −0.306 | −9.855 | ** | −0.304 | −9.958 | ** |
| | キャリア志向 | 継続志向 | | | | 0.164 | 5.361 | ** |
| | | 離脱志向 | | | | −0.03 | −0.993 | NS |
| F値 | | | 50.166 | | | 67.101 | | |
| R2乗 | | | 0.183 | | | 0.213 | | |
| 調整済みR2乗 | | | 0.179 | | | 0.208 | | |
| R2乗変化量 | | | 0.183 | | | 0.030 | | |
| F変化量 | | | 50.166 | | ** | 16.935 | | ** |

*：5%水準で有意　**：1%水準で有意

＜キャリア志向を独立変数とする重回帰分析＞

属性変数および＜キャリア志向＞尺度を独立変数、＜満足度＞尺度を従属変数とする重回帰分析を行った。結果を表4に示す。属性（性別、年齢、健康状態､家計状態）のみを独立変数とした場合、ｒ＝.428、r2乗＝.183であった。うち有意な係数を示したのは年齢、健康状態、家計状態で、年齢が高いほど、健康状態がよいほど、家計状態がゆとりあるほど満足度が高いという結果となった。属性にキャリア志向尺度を加えて独立変数とした場合、ｒ＝.462、r2乗＝.213であった。ｒ2乗は有意な増加を示した。キャリア志向尺度のうち継続志向尺度は有意な係数を示したが、離脱志向尺度は有意な係数を示さなかった。また、標準化係数（β）を比較すると健康状態や家計状態に対して継続志向尺度の寄与は相対的に小さいという結果となった。

属性変数および＜キャリア志向＞尺度を独立変

数、＜スピリチュアリティ＞尺度（3尺度）を従属変数とする重回帰分析を行った。結果を表5～7に示す。一体感尺度を従属変数としたとき(表5)、属性（性別、年齢、健康状態、家計状態）のみを独立変数とした場合は、ｒ＝.196、r2乗＝.038であった。うち有意な係数を示したのは性別、年齢で、女性で、年齢が高いほど、一体感尺度が高いという結果となった。属性にキャリア志向尺度を加えて独立変数とした場合、ｒ＝.510、r2乗＝.260であった。ｒ2乗は有意な増加を示した。キャリア志向尺度のうち継続志向尺度、離脱志向尺度とも有意な係数を示した。また、標準化係数（β）を比較すると継続志向尺度の寄与は離脱志向尺度や年齢・性別に対して相対的に大きいという結果となった。つぎに意味感尺度を従属変数としたとき（表6)、属性（性別、年齢、健康状態、家計状態）のみを独立変数とした場合は、ｒ＝.197、r2乗＝.039であった。うち有意な係数を示したのは性別、年齢、健康状態で、女性で、年齢が高く、健康状態がよいほど、意味感尺度が高いという結果となった。属性にキャリア志向尺度を加えて独立変数とした場合、ｒ＝.520、r2乗＝.271であった。ｒ2乗は有意な増加を示した。キャリア志向尺度のうち継続志向尺度、離脱志向尺度とも有意な係数を示した。また、標準化係数（β）を比較すると継続志向尺度の寄与は離脱志向尺度や年齢・性別に対して相対的に大きいという結果となった。最後に受容感尺度を従属変数としたとき（表7)、属性（性別、年齢、健康状態、家計状態）のみを独立変数とした場合は、ｒ＝.221、r2乗＝.049であった。うち有意な係数を示したのは性別、年齢、家計状態で、女性で、年齢が高く、家計状態がよいほど、受容感尺度が高いという結果となった。属性にキャリア志向尺度を加えて独立変数とした場合、ｒ＝.468、r2乗＝.219であった。ｒ2乗は有意な増加を示した。キャリア志向尺度のうち継続志向尺度、離脱志向尺度とも有意な係数を示した。また、標準化係数（β）を比較すると継続志向尺度の寄与は離脱志向尺度や年齢・性別に対して相対的に大きいという結果となった。

**表5　属性変数および＜キャリア志向＞尺度を独立変数、＜スピリチュアリティ：一体感＞を従属変数とする重回帰分析**

| 従属変数 | | | スピリチュアリティ：一体感 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| モデル | | | 1 | | | 2 | | |
| | | | ベータ | t 値 | 有意性 | ベータ | t 値 | 有意性 |
| 独立変数 | 属性 | (定数) | | 11.526 | ** | | 3.339 | ** |
| | | 性別 | 0.170 | 5.138 | ** | 0.171 | 5.894 | ** |
| | | 年齢 | 0.077 | 2.329 | ** | 0.060 | 2.057 | ** |
| | | 健康状態 | −0.061 | −1.824 | NS | −0.032 | −1.079 | NS |
| | | 家計状態 | −0.002 | −0.064 | NS | 0.002 | 0.053 | NS |
| | キャリア志向 | 継続志向 | | | | 0.484 | 16.349 | ** |
| | | 離脱志向 | | | | 0.086 | 2.897 | ** |
| F値 | | | 8.941 | | | 142.930 | | |
| R2乗 | | | 0.038 | | | 0.260 | | |
| 調整済みR2乗 | | | 0.034 | | | 0.255 | | |
| R2乗変化量 | | | 0.038 | | | 0.222 | | |
| F変化量 | | | 8.941 | | ** | 133.989 | | ** |

*：5%水準で有意　**：1%水準で有意

**表6　属性変数および＜キャリア志向＞尺度を独立変数、＜スピリチュアリティ：意味感＞を従属変数とする重回帰分析**

| 従属変数 | | | スピリチュアリティ：意味感 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| モデル | | | 1 | | | 2 | | |
| | | | ベータ | t 値 | 有意性 | ベータ | t 値 | 有意性 |
| 独立変数 | 属性 | (定数) | | 14.434 | ** | | 5.858 | ** |
| | | 性別 | 0.120 | 3.62 | ** | 0.121 | 4.194 | ** |
| | | 年齢 | 0.095 | 2.879 | ** | 0.078 | 2.685 | ** |
| | | 健康状態 | −0.101 | −3.02 | ** | −0.071 | −2.431 | ** |
| | | 家計状態 | −0.046 | −1.363 | NS | −0.042 | −1.432 | NS |
| | キャリア志向 | 継続志向 | | | | 0.495 | 16.835 | ** |
| | | 離脱志向 | | | | 0.085 | 2.882 | ** |
| F値 | | | 8.988 | | | 151.150 | | |
| R2乗 | | | 0.039 | | | 0.271 | | |
| 調整済みR2乗 | | | 0.034 | | | 0.266 | | |
| R2乗変化量 | | | 0.039 | | | 0.232 | | |
| F変化量 | | | 8.988 | | ** | 142.162 | | ** |

*：5%水準で有意　**：1%水準で有意

**表7　属性変数および＜キャリア志向＞尺度を独立変数、＜スピリチュアリティ：受容感＞を従属変数とする重回帰分析**

| 従属変数 | | | スピリチュアリティ：受容感 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| モデル | | | 1 | | | 2 | | |
| | | | ベータ | t 値 | 有意性 | ベータ | t 値 | 有意性 |
| 独立変数 | 属性 | (定数) | | 11.816 | ** | | 4.249 | ** |
| | | 性別 | 0.114 | 3.484 | ** | 0.116 | 3.879 | ** |
| | | 年齢 | 0.163 | 4.953 | ** | 0.148 | 4.951 | ** |
| | | 健康状態 | −0.004 | −0.128 | NS | 0.021 | 0.705 | NS |
| | | 家計状態 | −0.073 | −2.180 | * | −0.07 | −2.296 | * |
| | キャリア志向 | 継続志向 | | | | 0.424 | 13.936 | ** |
| | | 離脱志向 | | | | 0.077 | 2.542 | * |
| F値 | | | 11.500 | | | 207.297 | | |
| R2乗 | | | 0.049 | | | 0.219 | | |
| 調整済みR2乗 | | | 0.045 | | | 0.214 | | |
| R2乗変化量 | | | 0.049 | | | 0.170 | | |
| F変化量 | | | 11.500 | | ** | 92.297 | | ** |

*：5%水準で有意　**：1%水準で有意

## 考察と今後の課題

先に仮説として挙げた各項目を検証する。

仮説（1）「高齢者のキャリア志向には、活動理論や継続性理論によって概念化された「継続志向」的なものと、離脱理論や老年性超越理論によって概念化された「離脱志向」的なものの2つのタイプが認められる。」については、探索的因子分析の結果から「継続志向尺度」と「離脱志向尺度」の2つが抽出されたことにより、検証されたといえる。これら2因子が弱いながらマイナスの相関を示したことから対立的なキャリア志向の構造が示唆されたと考えられる。

仮説（2）「キャリア志向は満足度に正の影響を及ぼす。キャリア志向によって満足度が影響される程度は年齢、性別、健康状態、経済状態などの属性変数を上回る。」については、満足度を従属変数とする重回帰分析の結果から、キャリア志向（継続志向）の満足度に対する正の寄与が認められたものの、それは年齢や健康状態、家計状態などの属性変数を上回る寄与ではなかった。また離脱志向は満足度に対する有意な寄与を示さなかった。このことから仮説（2）は検証されなかった。

仮説（3）「キャリア志向はスピリチュアリティに正の影響を及ぼす。キャリア志向によってスピリチュアリティが影響される程度は年齢、性別、健康状態、経済状態などの属性変数を上回る。」

についてはスピリチュアリティを従属変数とする重回帰分析の結果から、キャリア志向の継続志向尺度、離脱志向尺度ともにスピリチュアリティに対する正の寄与を示し、特に継続志向の寄与は年齢、性別、健康状態、経済状態などの属性変数を大きく上回るものであった。離脱志向の寄与は、属性変数と同程度のものであり、継続志向が特異にスピリチュアリティに寄与する状況が示された。このことから仮説（3）は、検証されたといえる。

本研究においては、高齢者の満足度やスピリチュアリティを規定する要因として、年齢、性別、健康状態、家計状態などに加えてキャリア志向という社会心理的な構成概念の影響をみることが大きな目的であった。満足度においては、年齢、性別、健康状態、家計状態などの寄与がキャリア志向に比べて相対的に大きかったが、スピリチュアリティにおいては、キャリア志向の寄与のほうが、年齢、性別、健康状態、家計状態などを大きく上回っていた。キャリア志向を構成する2尺度、継続志向・離脱志向はともにスピリチュアリティに対して正の寄与を示したが、標準化回帰係数（$\beta$）の比較による影響度は継続志向が離脱志向を大きく上回る結果となった。また、満足度に対しては、継続志向は有意な正の寄与を示したが、離脱志向は有意な寄与を示さなかった。これらのことから、高齢者の心的満足や心的安定にとっては、離脱志向より継続志向のほうがよりポジティブな効果を持つことが確認された。これは社会老年学における活動理論と離脱理論の論争の中で離脱理論が実証的な根拠を示せなかったことと同様の結果といえる。これはまた、高齢者のキャリアが「離脱・撤退・引退」といった様相を中心に語られるだけでは不十分であり、高齢者固有の意義あるキャリアの追究が高齢者自身にとっても、それを取り巻く社会にとっても必要であることを示唆しているといえる。もちろん「生涯現役」を声高に叫ぶだけでは、現実的な施策につながるわけはなく、高齢者固有の生活と仕事の両面を含む「キャリア」の設計が求められていると考えるべきであろう。

## 要旨

高齢者の満足度やスピリチュアリティを規定する要因としてキャリア志向の影響をみることを目的に、全国に在住する55歳から88歳までの900名に対してアンケート調査が実施された。その結果、高齢者の心的満足や心的安定にとっては、キャリア志向が有意な寄与を示すこと、またキャリア志向の中では、離脱志向より継続志向のほうがよりポジティブな効果を持つことが確認された。このことから、高齢者のキャリアが「離脱・撤退・引退」といった様相を中心に語られるだけでは不十分であり、高齢者固有の意義あるキャリアの追究が高齢者自身にとっても、それを取り巻く社会にとっても必要であることが示唆された。

## 引用文献

Atchley, C. P. (1989). A continuity theory of normal aging. The Gerontologist, **29**(2), 183-189.

Atchley, C. P.(1995). Continuity Theory, in George L. Maddox ed., *The encyclopedia of Aging* (2nd edition), Springer,227-230.

Cumming, E. and W. H. Henry (1961). *Growing Old: The Process of Disengagement*, Basic.

Havighurst,, R. J. (1961). Successful Aging, *The Gerontlogist*, **1**, 8-13.

Havigurst, R. J., B. L. Neugarten and S. S. Tobin(1968). Disengagement and Pattern of Aging. In B. L. Neugarten ed., *Middle Age and Aging*, University of Chicago Press.

厚生労働省（2012）「平成24年雇用政策研究会報告書」

厚生労働省（2015）「平成26年簡易生命表」

Larson, R. (1978) Thirsty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology*, **33**, 109-125.

前田展弘（2012）.「高齢社会対策大綱の改定と今後の対策視点」ニッセイ基礎研レポート（ニッセイ基礎研究所）2012-08-31、1-8.

三澤久恵・野尻雅美・新野直明（2010）「地域高齢者のスピリチュアリティ評定尺度の開発」『日健医誌』18（4）：170-180.

Mroczek, D. K., & Kolarz, C. M. (1998). The effect of age on positive and negative affect: A Developmental perspective on happiness . *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1333-1349.

内閣府（2012）.「高齢社会対策大綱」.

小田利勝（2004a）「社会老年学における適応理論再考」『神戸大学発達科学部研究紀要』**11**（2）：361-376.

小田利勝（2004b）『サクセスフル・エイジングの研究』. 学文社.

清家篤（2013）.『雇用再生』.

Tornstam, L. (2005). Gerotranscendence: A developmental theory of positive aging. New York, Springer.

**［抄録］**

本研究は、高齢者の満足度やスピリチュアリティを規定する要因としてキャリア志向の影響をみることを目的に行なわれた。全国に在住する55歳から88歳までの900名に対してアンケート調査が実施された。その結果、高齢者の心的満足や心的安定にとっては、キャリア志向が有意な寄与を示すことがわかった。またキャリア志向の中では、離脱志向より継続志向のほうがよりポジティブな効果を持つことが確認された。このことから、高齢者のキャリアが「離脱・撤退・引退」といった様相を中心に語られるだけでは不十分であることが分かった。また、高齢者固有の意義あるキャリアの追究が高齢者自身にとっても、それを取り巻く社会にとっても必要であることが討議された。